# 泣きんぼうの話

小川未明

青空文庫

あるところに、毎日、よく泣く子がありました。その泣き様といったら、ひい、ひいといって、耳がつんぼになりそうなばかりでなく、いまにも火が、あたりにつきそうにさえ思われるほどです。

その近所の人々は、この子が泣くと、

「また、泣きんぼうが、泣きだしたぞ。ああたまらない。」といって、まゆをひそめました。

「泣きんぼう」といえば、だれひとり、知らぬものがなかったほどでありました。

こんな泣きんぼうでも、おばあさんだけは、目に入るほど、かわいいとみえて、泣きんぼうの後から、どこへでもついて歩きました。

「いい子だから泣くでない。そんなに泣くと、血がみんな頭に上ってしまって大毒だ。みなさんが、あれ、あんなに見て笑っていなさる……さあ、もう、いい子だから、泣かんでおくれ。」と、おばあさんだけはいいました。

そんな、やさしいことをいったくらいで、きく子ではありませんでした。

ある日のこと、往来の上で、なにか気に入らないことがあったとみえて、泣きんぼうは、泣き出しました。おばあさんは、また、大きな声を出しては困ると思ったから、

「なにがそんなに気に入らなかったのだ。いっておくれ、なんでもおまえの気に入るようにしてやるから。いい子だから、もう、そんなに大きな声を出して泣かないでおくれ。」と、あとから、子供についで歩いて、おばあさんは頼みました。

泣きんぼうは、やさしくいわれると、ますます体を揺すぶって、空を向いて、両手をだらりと垂れて、顔いっぱいに大きな口を開けて泣き出しました。いがぐり頭を日にさらしながら、涙は光って、玉となって日に焼けた顔の上を走りました。

白髪のおばあさんは、さしている日がさを地面に置いて、子供をすかしたり、なだめたりしました。二人の立っている往来の空には、とんぼが、羽を輝かしながら飛んでいます。

「やだい。やだい。ひい――ひい。」と、子供はいって、泣きました。

日盛りごろで、あたりは、しんとして、強い夏の日光が、木の葉や、草の葉の上にきらきらときらめいているばかりでした。人々は、家の中で、昼寝でもしようと思っているやさきなものですから、頭を枕からあげて口説きました。

「また、泣きんぼうが泣きだした。あんな、いやな子は、この世界じゅうさがしたってない。」と、ののしったものもあります。

「坊や、いい子だ。おばあさんが悪かったのだから、もう泣かんでおくれ。ほれ、ほれ、みんな出て坊やを見てたまげていなさる。あっちをごらん。」と、おばあさんは、子供の気をまぎらせようと苦心しました。けれど、子供は、泣きやみませんでした。

このとき、あちらの家から、だれか頭を出しました。

「あ、やかましくてしようがありませんね。泣かないようにしてください。」といいました。

「ほら、ごらん、やかましいとおっしゃる。いい子だから泣くでない。」と、おばあさんは、しわの寄った額ぎわに汗を結んで、子供に頼むようにいいました。

すると子供は、かえってあちらの方を向いて、いまよりも、もっ

と大きな声を出して泣きました。どうして、こんなに大きな声が、こんな子供の体から出るだろうかと、だれしも思わないものがなかったほどであります。

おばあさんは、孫の泣くのを見て、

「いまに、みんな血が頭に上ってしまって、ガンといって、頭がわれてしまうよ。」と、心配しました。

昼寝をしようと思って、家の中で、できなくてまゆをひそめているものは、いまにもあの声から火が出て、あたりの家や、草や、木に燃えついて、空が真紅になりはしないかと思っていたのです。

おばあさんは、ほんとうに困ってしまいました。ちょうど、そのとき、だれも通らない往来を、あちらから、男が、自転車に乗ってやってきました。

おばあさんは、子供をすかすために、

「もし、もし、この泣く子をつれていってください。」と、おばあさんはいいました。

「よしきた。さんざ、あっちの野原へいって泣くだ。」と、男は、ひょいと泣く子を抱きあげると、おばあさんの止めるまもなく、さっさと、あちらの野原の方へ走っていきました。

男は、自転車に、泣きんぼうを乗せて、広い野原の真ん中へつれていって降ろしました。

「さあ、ここでうんと泣くんだ。そうしたら、黙るだろう。」と、男はたった独り、子供を野原の真ん中に残して、自分は、自転車に乗って、また、どこへとなく走っていってしまいました。

子供は、野原の真ん中で、大きな声を出して泣きました。けれど、だれも、その泣き声を聞きつけるものはなかったのです。太陽と雲とが、この声を聞きつけて、びっくりしました。そして、じっと下を見つめていました。

「ああ、かわいそうに、あの子を花にしてやれ。」と、太陽は、独りでいいました。

このとき、おばあさんが、とぼとぼと小径を探しながら、野原へ歩いてきました。

「あんなに、おばあさんが子供を探しています。子供が見つからなかったら、どんなに歎くでしょう。」と、雲は太陽に向かっていいました。

「あの老婆も花にしてやれ。」と、太陽はいいました。

子供と老婆が、二人とも村からいなくなったので、人々は驚いて、方々を探しまわりました。けれど、ついに見当たらずにしまったのです。そして、広い、広い、野原の中に、明くる日、一本の脊の高いひまわりの花と、一本のかわいらしい、ひなげしが咲いていました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　3」講談社
　　1977（昭和52）年1月10日第1刷
　　1981（昭和56）年1月6日第7刷
初出：「時事新報」
　　1922（大正11）年8月16日
※表題は底本では、「泣《な》きんぼうの話《はなし》」となっています。
※初出時の表題は「泣きん坊の話」です。
入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班
校正：江村秀之
2013年12月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 泣きんぼうの話

小川未明

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/